



愛隣幼稚園..... 園だより 13. 7月号

無関心ではられない

大きな泣き声が聞こえてきます。何が起こったのかと職員室を出て声のする方へ行ってみました。ばら組のテラスの前でTくんが、擦りむいて血がにじむ膝を抱え大きな声で泣いていました。「転んじゃったの？痛かったよね〜」声をかけてみましたが、いっこうに泣きやむ気配はありません。しだいにばら組の子どもたちが集まってきました。心配そうな顔で、「どうしたの？」「だいじょうぶ？」と覗き込んでいます。Tくんはその日、1年ぶりに愛隣幼稚園に戻ってきた仲間でしたが、ばら組の子どもたちはいつもと変わらない様子で彼の周りにいました。子どもたちはこんな時、大抵、無関心ではいません。“泣いている”ということで、そこにいる仲間のSOSに気付きやすいということもありますが、みんな自分の経験に置き換えて、“これは一大事！”と集まってきてくれるのです。自分が転んだ時に痛かったことを思いだして来てくれる仲間がいます。「だいじょうぶ？」って声をかけてもらった時の嬉しい気持ちが、自分もそばに行って声をかけるという行動の後押しをすることもあつてでしょう。こんな時はそばに行って声をかけてあげたら、あの時の自分のようにきっと嬉しい気持ちになって、涙も止まるはずだと、誰もが信じて泣いている仲間のそばに集まってくるのです。もしこんな時、子どもたちが誰ひとり“泣いている”仲間に関心を寄せず、「だいじょうぶ？」と顔を覗き込むこともなかったら・・・それはとても寂しい光景です。でも、そんな場面が子どもたちの毎日の中に全くないわけではありません。たとえ幼児であっても、その時の自分の都合が先行してその場を通り過ぎてしまうことだってあります。或いは、やや意図的に“知らん顔”をきめこむことだってあるのです。

それは“無関心でない”ということにエネルギーが必要なこともあるからです。泣いているひとりを数人の子が囲んで一方的に責め立てていたら、そのひとりを助けるためにそばに行くことはとても勇気のいることです。助けてあげたい気持ちがあつても、“知らん顔”で通り過ぎたくなるものです。直感で“かかわらないほうがいい”ということがわかるのでしょうか。同じ“泣いている”でも、場面が違えば状況は変わります。先生たちはそんな子どもたちに出くわした時、もちろん見て見ぬふりではしません。（自分たちで解決できるかをそばで注視することはありますが）まず当事者たちに、何故ひとりを大勢で責めるようなことになったのかを聞き、問題解決のための支援をします。しかしそれを見ているながら“知らん顔”でいた当事者でない仲間たちには、もっと、大切なことを伝えたいと思います。「どうしてやめなって言ってあげなかったの？知らんぷりはだめだよ。泣いてるのに、困ってるのに、どうして誰も助けてあげなかったの？」と本気で投げかけます。考えてほしいからです。ここにいる仲間たちには、こんな場面に出会った時にも「どうしたの？」「だいじょうぶ？」と声を掛けることができる仲間であってほしいからです。見て見ぬふりも、無関心もやっしまえば簡単で、面倒な事にも巻き込まれないでいられます。でも、自分さえよければいいという人生は貧しい。人からしてもらって嬉しかったことを、次には他の誰かのためにしてあげることができる人生は豊かだ、という経験をしてほしいと願っています。

おとなになるにつれて、関わらないでいたいことが増えていきます。関わったところでどうにもならないと知っているので関わらないこともあります。心が痛むのもうこれ以上知りたくないと敢えて見ないようにすることもあります。しかし、ひとり一人の小さな無関心によって、気付かぬうちに社会の大きな流れが、私たちの望まぬ方向へいってしまうようなことも起こりうるということは覚えておかなければいけないと思います。この流れの先に、子どもたちの未来があるのです。無関心ではられません。